



寺報

2013年(平成25年)

No. 209

4月号

Zenkyo-ji monthly
Communications Paper
En [えん]

縁



庫裏玄関前の石 善教寺「石」シリーズ その3

楽しい仏教用語

その21

【堪忍（かんにん）】

徳川家康の『人生訓』の一つに
「堪忍は無事長久の基」とあります。

堪忍は、堪え忍ぶこと、我慢すること、怒りをこらえて他人の過失を許すことを意味する言葉です。私たちの世界は、苦しみや悩みが満ちていて、人は堪え忍んで悪をなし、菩薩は教化のために堪え忍んで苦労しておられるので、現実の世界を、堪え忍ぶ世界という意味の「堪忍世界」とか「堪忍土」といいます。また、堪え忍ぶという意味のインド語「サハ」から婆娑世界とも呼んでいます。

【観念（かんねん）】

観念は見解や思い、覚悟やあきらめを意味する日常語です。とくに、西洋哲学が我が国に輸入され、ギリシャ語の「イデア」を「観念」と訳してからは、経済観念、善惡の觀念、觀念論など、さまざま分野で用いられるようになりました。

この観念は仏教語で「觀察し思念すること」という意味です。真理や仏の姿などを、ここを集中して思い浮かべて深く考えることです。そのことによつて、自分を仏に近づけようとする修行が、印度では古くから行われたといいます。

阿弥陀仏や極楽淨土の相を觀念する觀想の念佛に対し、法然上人は「觀念の念にもあらず」と述べ、「南無阿弥陀仏」と称える称名念佛を説かれました。(辻本敬順氏「仏教用語豆辞典」参照)

菩薩の十地（菩薩の修行の位を十の段階に分けたもの）の第一は「堪忍地」で、菩薩がこの位に達すれば苦惱をよく堪え忍ぶといいます。このように、堪忍は仏典にしばしば登場します。

がこの位に達すれば苦惱をよく堪え忍ぶといいます。このように、堪忍は仏典にしばしば登場します。

住職レター

暑さ寒さも彼岸まで…のとおり、ようやく、過ごしやすくなつてきました。ですが朝晩まだ肌寒く、日中の気温差が激しい時ですから、お大事にお過ごし下さい。

春分の日を中日とし、それぞれ前後三日間、計七日間をお彼岸と云われています。

「彼岸」とは、インドの古い言葉(梵語)でパーラミターといい、「到彼岸」と訳されます。「迷いの世界である此岸から、悟りの世界である彼岸へと到る」ということです。彼岸のことをお淨土といつてもよいでしょう。春と秋のお彼岸の中日には、太陽が真東からのぼり、真西に沈みます。まさに西方十万億土の阿弥陀さまの國、極樂淨土をしのぶという習慣が伝わりました。聖徳太子の時代から、お彼岸は日本人の生活に染みこんでいます。お彼岸期間中は、お淨土をしひび、すでに往生された人、ご先祖を憶い、お寺参り・お墓参りするご縁の中で、お淨土へ生まれさせ伝えます。

世は無常、我々の命は明日が分からぬ…、理屈では分かつています。しかし、人の死ほど悲しいものではなく、その方とのご縁が深ければ深いほど、悲しみが増すものであります。

